

33歳で独立した若手医師が語る「開業に向いている人」-渡邊功・iこころクリニック日本橋院長に聞く◆Vol.2

インタビュー 2021年8月21日(土)配信 庄部勇太 (m3.com契約ライター)

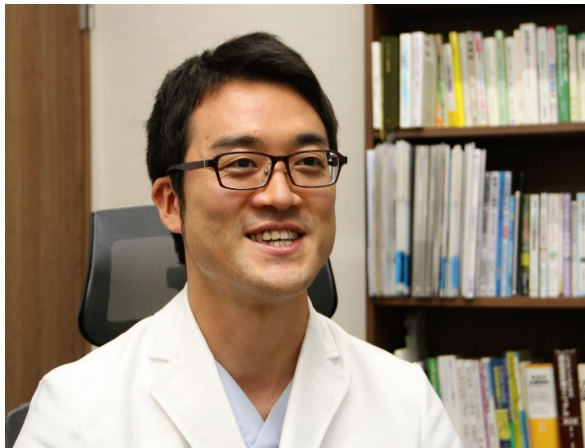
「開業医の大変さややりがい、大切なポイントが徐々に分かるようになってきた」。2019年12月に33歳で開業した精神科医の渡邊功氏はこの1年7カ月を振り返り、そう話す。患者の満足度と医師としての満足度はどうか、1日に何十人も患者を診る外来診療はしんどいのか、開業医に向いている人とは――。「開業後のリアル」を聞いた(2021年7月8日インタビュー。全2回連載)。⇒Vol.1はコチラ

――開業して1年7カ月が経ちます。患者の満足度については手応えを感じますか。

患者さんには申し訳ないのですが、正直、昨年の出来は「患者満足度が高い」とは言えないものでした。振り返ると、開業当初はめちゃめちゃ大変でした。当初は私、事務1人、臨床心理士1人(事務兼任)の3人体制でしたが、開業医としてスタッフを雇い、チームのリーダーとして診療するのは初めてだったので、診療に硬さが出てしまった感は否めません。また、勤務医としてクリニックに勤めていた時に診る患者さんの数は多くて1日に20人ほどでしたが、開業ほどなくて倍近くに増えたので、タイムマネジメントをミスすることもありました。

経営者としてはスタッフの目も気になりました。残業すると怒られるんじゃないかなって(笑)。時代的にも良くないものとされますし、トップの私が残っていると周りが帰りがづらくなるかもしれません。総じて、医師と経営者の両輪をうまく回していくのが難しかったですね。

ただ、そんなあたふたした状況も2年目には落ち着き、今年は診療・経営ともに安定してきたと思います。



渡邊功院長

――開業医として患者をたくさん診るのはやはり大変?

そうですね。きついです。1日に何十人も患者さんの話を聞き続け、話し続ける、それを言葉を選びながらやるというのは、とても体力の要ることだと思います。まして、精神科医は言葉のチョイスが重要ですから、気が抜けません。開業1年目の時、1日の診療が終わろうとするころには意識がふっと遠のくような、そんな感覚に襲われたこともありました。

その意味で、運動はより意識して行うようになりました。開業してから1日5～10キロメートルのジョギングを週に3～5日は続けており、後に水泳も始めたおかげか、以前よりも疲れにくくなって、集中力も長く続くようになったと感じます。患者さんから病気の話を聞き続けていると自分の気持ちにも少なからず影響を受けるので、気分転換にも良い。開業医にとって体調管理は必須のタスクではないでしょうか。今秋にはトライアスロンの大会に出る予定です。

――医師としての満足度はいかがですか。

高いです。想像していた通り、薬の選択の幅が広がるなど診療の自由度は高まりました。また、当院は2020年4月中旬にオンライン診療を始めたのですが、これは国が同月上旬に新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策として初診からのオンライン診療を解禁したことを受けてのものです。国の動きや患者ニーズを考えてスピーディーに診療体制を変えられるのも開業医の強みでしょう。

精神科の特徴で言えば、心理士と密に連携できるようになったことはうれしい変化でした。過去に勤めた病院にも心理士は在籍していましたが、クリニックの方が互いの距離が近く、情報共有の密度が上がったと思います。それが治療効果にもポジティブに影響している印象があります。

——「開業すると雑務が増える」と聞きますが、どうでしょう。

それは本当にそうで、診療以外の雑務はかなり増えました。今は私が院内の床やトイレなどを掃除していますが、勤務医時代に自分の業務として掃除をしたことはありませんから。

ただ、こういった雑務も含めて経営者の仕事を楽しまれているんですよね。私は診療だけだと物足りなく感じてしまうタイプなのでしょう。経営や人事のことを考えたり、患者ニーズや今後のクリニックの展開を想像したりするのがとても面白い。「自分はいろいろやるのが好きなんだ」と改めて感じました。そして痛感したのが、医療の世界は事務スタッフの役割がとても重要だということです。私もこれから事務や受付の仕事を覚えようと思っています。

——現時点で先生が思う「開業医に向いている人」とは。

「任せられる人」です。言葉にすると当たり前ののですが、組織を経営していくことは一人ではできないことで、スタッフと協力し、さまざまな外部の助けを得ながら進めていく必要があります。このあたりは「1日にどれほどの患者を診られるか」と同じで、適性があるかもしれません。

医師はどちらかと言えば、「自己完結型」の人が多いのではないのでしょうか。仕事の上で大なり小なり権限を持っており、他者から批判されることも少ないため、人に任せるのが不慣れだったり、得意ではなかったりする人が多い印象です。

かくいう私も、人に任せることは苦手でした。受験勉強も一人で黙々としていましたし、人に相談しながら物事を進めていくことはあまりありませんでした。だからこそ、開業前から人に任せること、人を頼ることの重要性を意識していたつもりでしたが、開業してみるとそれは予想以上に大切でした。

——少しずつ人に任せることには慣れてきていますか。

そうですね。任せ慣れを狙って、小さなことからスタッフにはお願いするようにしています。書類の処理だったり、人事関連の説明だったり。例えば、非常勤の先生が入職するためにクリニックに訪れた際、開業1年目のころは私が全て案内したり説明したりしていましたが、今は部分的に事務や心理士に任せています。「任せて嫌な顔をされると…」とためらいそうなこともありますが、「これはもう訓練」と割り切り、丸投げにはならないよう気を付けつつ、タスクシフトするようにしています。

さっき話したので気付きましたが、掃除をお願いできていないことを考えると、まだまだですね（笑）。

——最後に、クリニックの展望をお聞かせください。

将来的には精神科の総合デパートのような存在に成長させていきたいです。外来を行う精神科医だけではなく、カウンセリングを担う複数の臨床心理士・公認心理士がいて、企業のメンタルヘルスに携わる産業医もいる。精神科の訪問診療も行い、患者さんの復職のためのリワークプログラムも行う。既に実現していますが、海外を含めた遠方にお住まいの方にはオンライン診療で対応する——。分院展開も頭にあります。「このクリニックに相談すれば何か解決の糸口が見つかりそう」。そんなふうには患者さんに思ってもらえるクリニックにしていきたいです。直近では副作用がほとんどないと考えられている「TMS治療（磁気刺激治療）」を8月に始めます。

スタッフは現在9人おり、このうち非常勤の医師が4人います。今後もさまざまな医療者と関係を築いていきたいですね。オンライン診療や開業に興味のある先生はぜひ見学に来ていただきたいです。

⇒Vol.1はコチラ

◆渡邊 功（わたなべ・いさお）氏

2012年福島県立医科大学卒。国立国際医療研究センター国府台病院や北里大学東病院、神奈川県のおひさまクリニックセンター北などへの勤務を経て、2019年、iこころクリニック日本橋を開院した。

【取材・文・撮影＝医療ライター 庄部勇太】



